

とを心配しながら防空壕に避難する。さいわい敵機は一機で、昼に空襲した所をてい察にきたらしい。まもなく解除になつた。

翌朝ねむい目をこすり、お礼をいつて山の家へ向かつた。

(名古屋市緑区在住)

## 豊橋の街まちが焼失したとき

朝 倉 治 子

一九四五年（昭和二十年）六月二十日未明、みめい 豊橋市とよはしはアメリカの航空機B29の襲撃しゆうげきを受けた。今から三十数年前のことである。

「人の記憶きおくには限りがある。」

「今、記録しておかねば。」

というあせりにも似た気持ちでペンをとつた。

その夜、私たち兄弟はまくら元に防空ずきんと衛生箱（救急箱）を置き、服を着たままでどこについていた。いつ起こされてもそのまま玄関前の防空壕に飛びこめる準備である。あの頃は毎夜のように空襲警報が出されて、服のままでねむる日が続いていた。

「東海軍管区情報、東海軍管区情報」

「警戒警報発令！警戒警報発令！」

ラジオから流れてくるアナウンサーの声で目が覚めた。電灯にはあかりが外にもれないように、三角形のかさがつけてある。しかし、私たちはその電灯さえ特別な時以外にはつけないようになした。トイレへも、かべを伝い手さぐりで行つた。外はぶきみなほどに暗い。いつものようには父は家の周りを点検し、火たたき、用水の水、バケツの水と、万一の場合に備えている。

ついに豊橋にも空襲警報が発令された。私たち親子五人は、ふとんを二、三枚持つて防空壕に入つた。ゆかにはザラ板がしいてあり、土のほら穴はむつとしけつていた。防空壕へは今までにも何度も入り、そのままねむつてしまつたり、警報解除の後、家に入ってねなおしたりしていたが、その夜は、何となくようすがちがつていた。

壕へ入つて間もなく、すぐ近くですさまじい音がした。耳をつんざくようなものすごい音に、私のねむ気はいつぺんにふつ飛んだ。ようすを見るために外に出ていた父がもどってきて、「危い！すぐに出なさい。」とさけんだような気がする。親子四人は壕の外へ飛び出した。母は私の手を強くつかんでいた。トタン屋根をむしり取るような「バリバリツ」という音にまじつて「早く、早く。」とわめいている大人たちの声が聞こえる。強く引っぱられる手が痛い。足がからむようでなかなか前に進めない。ネオンがついたり消えたりするように、あんなに暗かつた道が明るく輝く。ダダダダダという音。悲鳴。わめき声。逃げろ逃げろの連続。走りながら見上げる空

はまつ赤に染まっていた。黒いはずの空は赤一色にぬり上げられ、ゆらゆらとゆれているようだ。花火を打ち上げるような音が腹にひびく。夢中になつて走つて行く方向もまつ赤に燃えている。いつたいどこへ行こうとしているのだろうか。母はぐいぐいと私の手を引っぱり続ける。たしか関屋町まで逃げてきた時だ。ふくろ小路のような所にきた時、頭の上から何かがバラバラと降ってきた。思わず道ばたのみぞにふせた。ほかの人々も同じようにふせている。みんな目的を持つて走っているのではない。ただ、むやみやたらに逃げ回つてゐるのだ。

B29の爆音。たばになつて投下される焼夷弾の金属音。グオーンという家がかたむくような音。あらゆる音が入りまじつて耳がおかしくなるようである。大橋が焼夷弾で焼け落ち、豊川べりに避難した人たちは川につかつて火を避けているそうだ。地獄のようなありさまである。

三十分ほどして、吉田神社のほりの所に来た。ほりの水はぬかれ、横穴式の防空壕がほられていた。どのようにしたのか覚えていないが、壕の中に座つて土のにおいや草のにおい、物のこげるにおいをかいだ。「このあたりも火の海になるのだろうか。」「火は防空壕の上を通つて行くかもしれない。」いろいろな考證が頭の中をかけめぐつた。ふと、壕の入り口の木の間から見えるまつ赤な空を見て、とても美しいと思つた。ふしぎと死への恐れはわいてこなかつた。

時間がたつのがおそい。まるで時間が止まつてしまつたようだ。のどがかわいてひりひりしてきた。水どうを持ってこなかつたことをくやんだ。兵隊さんがタオルをぬらして持つてきてくれた。私はそのタオルを音を立てて吸つた。タオルの水は豊川のものだつたろうか。それとも神社



の手洗用のものであつたろうか。命のよみがえるような尊い水であつた。

「日本の一番長い日」という映画があつたが、私にとつて、このおほりの中での一夜が一生の中で最も長い日であった。

豊橋の街を焼きつくしてB29は引き上げていつた。すべてを焼きつくし、破壊すること、これが戦争だと思った。悲しいとか、困ったとか、そういう思いは何もなかつた。ただ、すべてが変わつてしまつたと思った。

つかれはてた私は、朝になつてから少しねむつたようだ。

さがし歩いてきた父に起こされて家に向かつた。足のふみ場もない焼け跡。<sup>あと</sup>まだくすぶり続けている煙。豊橋の街はすっかり変わつていった。

どころどころが黒ずんでいた石の門柱。こげ

て半分になつて立つっていたシユロの木。ごはんがまつ黒にこげてへばりついていたおかま。広い焼けあとを前に、私たちの家族はほんやりと立ちつくしていた。

### あくる二十一日の朝。

私たちはとぼとぼと歩き始めた。まつ黒な顔、足をずるずると引きずつて飯田線にそつて、豊川に向かつて歩いた。豊川に着けばたき出しのおにぎりがもらえるという声を聞いた。しかし、だれも口をきかなかつた。そういえば夕べから何も食べてはいない。けれども、食欲はまつたく起こつてこなかつた。ただ、足が重かつた。モンペはよれよれになり、上着はぼたぼたとふくらんで重くなつていた。

親せきの人をさがしに来る人たちに出会つた。目をぎょろぎょろとさせて、こわいような顔をしていた。私たちも新城から来てくれた叔父に出会つた。叔父も殺氣さつきだつたけわしい目をしていた。私たちのほうがびっくりするほど顔つきが変わつていた。

牛久保の駅の近くで、おたがいに生きていたことを確かめ合い、こおどりした。

豊川からは焼け残つた飯田線に乗つて新城に向かつた。小学校六年生だつた私、四年の弟、一年生の妹、そして、父と母。みんな無気力の状態で汽車にゆられていった。

今から二十数年の昔。豊橋の街が焼失した時のことである。

(豊橋市三本木町在住)